
つまらない話

優陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つまらない話

【Nコード】

N7376A

【作者名】

優陽

【あらすじ】

1人の少年が思い浮かべる、くだらない話。その少年さえも、くだらない時間に巻き込まれつつあることは、他の誰も知る由のないことであった。

つまらない時間（前書き）

短編集です。

一応、すべての話が繋がっている形をとっていますが、一つ一つで完結されているので、すべて読まなくても、それぞれで楽しめます。

つまらない時間

つまらない話を集めても、ただつまらなさが増すばかりだ。

しかし、時につまらない話は、いい暇つぶしになると思うのだ。

そう思い、回想する。

そうすれば、周りのことが、すべて見えてくるようだ。

もわわゝん

もわわゝん

もわわゝん

ピュアな下心の話

僕は鈴木さんの右手の部屋に住んでいる。

鈴木さんの足下の階に住んでいるのは胡麻ごまちゃん。

彼女とは話したことはない。

いや、これから話せるかどうか……。

なにせ見る機会も少ないのだから。

夕方、鈴木さんは部活で汗を流していた。

テニス部だ。

1球1球一生懸命に打っていることが分かる。

僕の体にもそれが伝わり、汗がどっと流れ出る。

そんな中

「おっ、甘い球が来た」

そう思った矢先、彼女のスマッシュが炸裂した。

スマッシュは僕にも炸裂した。

それは血飛沫となって顔中に広がる。

彼女がスマッシュを決めた瞬間チラリと見えるスカートの中を見て。

彼女のケツを見て。

正確には、ケツについている黒胡麻を見て。

僕が惚れている胡麻ちゃんを見て。

ホクロの黒胡麻ちゃんを見て。

夜、鈴木さんは自宅で、右手のホクロの部分にばんそうこうを貼っていた。

不思議そうに呟く。

「どこかでケガしたっけなあ？ 痛くもないし、何で血が出てるんだろう？」

右手ホクロの僕は目の前が塞がったことで嘆いていた。

「ああ、僕の飼い主の鈴木さん、何てことをしてくれるのです。これじゃあ何も見えないじゃないか。こんなこと……。でも僕諦めるしかないのかな。同じ体に住んでる家族に恋してしまうなんて……」

毎日のお風呂の時間、オケツに住んでいる胡麻ちゃんと唯一触れることの出来る時間。

それがなくなってしまった僕は、その日ついに消えていった……。

召し上がる話

高田家は毎朝、家族全員で朝食をする事になっている。まず最初に起きるのは母と父。

さっそく二人は早朝から調理に取りかかる。

母は栄養士、父は料理教室の講師というだけあって手際がいい。作っている最中に香りに釣られて長男が起き出し、ベッドで横になっている祖父を起こす。

その後すぐに作り終え椅子を並べてみんなが揃ったとき

「いただきます」

と、朝食を開始する。

料理が美味しいだけに会話も弾み、皆が楽しんでいるようだった。

特に、祖父はこの一家団欒を生き甲斐のようにしており、どんな場合でもここへ欠かさず来ていた。

例外はない。

普段は寝たきりの人だが、この時ばかりは元気になるのだ。

しかし何年か経ち、とうとうというか、その日祖父は亡くなった。これはどうも仕方のないことである。

翌朝、いつものように両親が朝食を作り始め息子が起き出した。

そして息子はいつものように祖父を起こしに行こうとしたが母に止められた。

習慣と言うのは恐ろしい。

場違いな息子は椅子に座ってただ朝食を待つのみだった。

そして朝飯が作り終えたので手を合わせ

「いただきます」

と家族全員で言った。

それも例外無く。

しかし母も父も息子も小さな声でしか言えなかった。

この状況では手を合わせるのも気負いする。

長い間沈黙が続いた。

高田家の誰もが「ああこんな時に祖父がいれば」と考える。

一方死んでしまった祖父は、霊となってその光景を見ていた。

「なんじゃあ！今日は息子が起こしてくれなかった。これは一体どういうことだ。をいお前ら、わしも混ぜろ」

と側に寄ってどんなに叫んでも決して届く事はない。

やがて、この寂しい光景を見ていた祖父はつまらなさそうに去って行った。

生き甲斐を無くした男は死ぬしかないのだ……。

既に死んでいるが。

召し上がる話（後書き）

ここまで読んでくれてどうもありがとう。

『召し上がる話』はショートショートによくあるシニールさや、ブラックコメディ的な発想をモチーフにしました。

全体的に暗く重たく仕上がっていると思いますが、それが雰囲気となって伝わればいいなあと思って書いたんですがどうだったんでしょう。

自分では起承転結は上手くできていると思っています。

なので、短編としてのまとめ方はなんとかあったかなあと。

あとは祖父の思いがどのように伝わったか……気になります。

これからも書いていきますので、ぜひ読んでみてください。つい

でに、感想まで書いてくれると、とてもとても喜びます（笑）

頑張りますので、みなさんも小説作りガンバってください！

機会の見計らう機会

「つまんねえよなあ」

冷蔵庫は炊飯器に話しかけた。

「コツチは引つ切り無しに体を冷してるんだぜ？働き尽くめっていうのも困りモンだよ。そっちはどんなもんだい」

まるでナンパをする男のような喋り方だった。

それに対して炊飯器は

「うるさい！気安く喋りかけないでよつ。あたし今熱気プンプンで常にこうしてないと体が持たない！特に仕事だと……ほらっ、あなたも仕事しなさいよ！」

気が立っているようだ。冷蔵庫の方が図体は大きい。男(?)としても負けてはいられない。

「あつそ。俺は働き尽くめだけど君はご飯炊くときしか働かないだろ？つまり必要とされてないんだよ、人間様ひょうやまに」

と挑発するように言う、語尾を強めて。

すると突然、それが仕事だと言わんばかりに炊飯器は喚き泣きだした。

それを見た冷蔵庫も、情けない事に炊飯器に釣られて大声をあげて泣き出した。

炊飯器への思いやりなのかもしれない。

“ウーーン”という機械音が室内に漏れる……

「いい加減にしてくれないか？」

どれだけ待っていても泣きやまないことに怒り心頭した冷凍庫が冷たくあしらう。

幾らか初登場の機会を見計らっていたようだ。

「僕の上のポンコツ冷蔵庫クン。普段から君は煩すぎなんだよ。冷蔵庫なのだから他人に冷たくしろ、いいな！そうでないとおろくに仕事もできやしない。それに泣くんじゃない。お前の泣き声は煩すぎ

て人間に嫌われる。そんなことになってみる、僕たちは捨てられる事になるんだぞ？機能しなくなるという事は……そんなこと考えたことも無いよな」

そんな冷凍庫の意見は、誰のせいだか、まだケツが青い冷蔵庫には、通じない。

音をたてていた冷蔵庫は冷凍庫に向かって、ついにキレた。

「うるせえ！俺はポンコツじゃあねえ！」

叫び出した冷蔵庫を見て冷凍庫はぼやく。

「そんなに熱くなっていたら中身が腐るよ……。もう腐っているか」
冷凍庫は冷静だった。

そして予測する。

「今のままの君じゃすぐに……」

突然、カチャツと扉の開く音が聞こえるとドスドスという振動が伝わって来て、何者かが近づいてくる気配が感じられた。

しよっちゅう感じるものだ。

どうやら帰ってきたらしい。

冷凍庫は心拍数のはねあがり、自分の能力をフルに出そうと踏ん張った。

そしてよくみる。

僕等を使っているアレが今コチラに向かって……。

アレは僕の上の存在を見つめ不審がっている。

およそ僕たちには理解できない、よく分からぬ言葉を発しながら。

今、上から冷気が飛び出してきたことにより冷蔵庫が開けられたのだと分かった。

自分も開けられるかという期待と、何をされるのかという不安が入り混じりドキドキしていると何かを捻る音が聞こえそれきり冷蔵庫の音は止んだ。

それと共にちょうどいいくらいの静かさ、いや温度へと変わっていったのが分かる。

幸い僕にはそんなことはされてないようだ。
それをされると寿命が縮まるという噂がある。
だから僕たちに任してくれた方がよっぽどいいのだが。

辺りは完全に静まり帰った。

冷蔵庫も機能を果たして寝静まつたらしい。

真っ暗だ、部屋も自身も。

これはいつもやってくる、僕達にとってはかなり楽な時間でもある。
中を管理するのも明るい時より楽だし、僕達が管理されることもない。

ふと、炊飯器のことを思い出した。

あれはどうだったのだ。

そう思い前方に目を凝らして見ると“保温”と書かれたランプが点滅している。

うん、なるほど、仕事を終え、中の品質を保つ作業に取り組んでいるわけだな。

なんだ、僕達より大変ではないか。

冷蔵庫め、炊飯器を甘く見ると痛い目にあうぞコリヤ。

痛い目といえば、炊飯器の彼は毎日泣き喚いているようだ、あれは何の為だ？

もしかそれが仕事なのでは……。

そんなことはないよな…。

そうだとしたら冷蔵庫の野郎が可愛そう過ぎる。

人間の男が女に振りまわされることはあるだろうが、冷蔵庫が炊飯器に振りまわされるなんて許せない。

僕達の方が図体は大きいし、ずっとずっと消費する力も大きいのだ。
あれ。

でも確か、消費する力が大きいのは、アレにとっては不便だったのだっけ？

まあ、考えるのはやめにしておこう。

余計なことに力を消費してしまう。

確か“電力”というやつを消費するのだ。

それにしても今日は疲れた。

きつとみんなこうやってやってきているのだろうな。

冷凍庫は考えるのをやめ、皆と同じように眠り出した。

一部始終を見ていたストーブは

「炊飯器め！被害者ぶりやがって。いつも泣き喚き水蒸気を出しきって随分とストレス発散できるじゃないか。俺なんか冬の時期しか使われないんだからお前よりかよっぱど必要とされない存在なんだ……すぐに買い替えられるし。そういえばおじいちゃん言ってたなあ。昔は頭にやかんを乗せて活躍してたのに今じゃめっきり仕事が減ったって……」

他のものと比較し自分の不幸を訴えた。

辺りはすごくすごく静かで誰も聞いてくれるモノはいない。

ストーブは無性に悲しくなり周囲に油を巻き散った。

そして憎しみの炎を点火した。

呪いの夢

「最近、胸がズキズキと痛いのです」

この日の朝1番に精神科に訪れた若者が言った。

「そうなの。それなら胸ヤケのお薬を飲んだらどうですか？」

精神科医の大門寺鈴子はペンとメモを準備しながら薬を勧めた。

「いや、でも、治りそうにも……」

「やってみなきゃ分からないじゃない。それに身体的な事で相談に来たなら他の病院を当たってください。ちゃんとしたお薬も出せますよ」

「それがどうにも、それだけでは無さそうなんで……」

「どうということかしら？ 私に話してちょうだい」

話を聞いてみると、どうやら若者は毎晩同じ夢を見ているらしく起きたときに胸がズキズキと痛むということだった。

簡単なメモを走らせながら次々と質問していった。

「ええ。では次の質問ですが、初めてその夢を見たのはいつだったかしら」

患者の若者は肩を震わせながら怯えた口調で答えた。

「先週の土曜の夜で……あの……先生……僕すごく怖いんです」

「大丈夫です。きつと良くなりますよ」

患者の肩をポンツと叩いて元気づけさらに質問を投げる。

「先週の土曜の夜っていうと、ちょうど1週間経つわね。その日に何か特別な行動を取ったりしなかったかしら。差し支えなければ夢の内容を教えてくれないかな？」

若者はしばらく躊躇っていたが、決心し、答えた。

「お酒を飲んで酔っ払っていたので殆ど覚えていません。高校の同級生の女の子が僕の家に来て、一緒にお酒を飲んだことぐらいしか……。夢の内容ですか……。それは恐ろしくてとても……」

「その女の子が怪しいわね。お酒に毒を混入されたとか……。その人とは今から連絡とれない？もしかして何か知っているかもしれない。夢のことは私も無理して聞こうとは思わないわ。ただ、話す気になったら話してちょうだい」

「それが、その日に急に僕の家に来たんで連絡はとれないです……。夢……頑張つて話します……」

夢の内容を聞いた鈴子はサツと立ちあがり有無を言わさぬ口調で言う。

「それは恋じゃないですか？きっとそうです、そうに違いありません。その女の子が夢に出てきたんです！」

「でも……そんな感じは……まさか」

「いいですか？胸のドキドキは恋ですよ。私も大学時代は同じサークルの男性に恋しちゃってたなあ。今思い出しても恥ずかしいことばかり。あんなことやこんなこと……なんかすっごい興奮しちゃったあ。って私、何話してんだろ。気にしないでね、とにかくそれは恋よ、恋じゃなきゃ何だって言うのよ！」

昔の恋愛を思い出し興奮していた鈴子は、患者の男を強引に説得した。

そして患者の男の方は浮かない表情で帰っていった。

興奮し過ぎて疲れた鈴子は重い腰をソファに落ち付け、珈琲を口に含む。

ホットコーヒーを飲みながらホッと落ち付けるこの時間が鈴子は好きだった。

とてもまともな精神科医ではない鈴子だったが仕事は真面目にやっていた。

小さな診療所、それも1人で経営しているのだが破格の値段で診てもらえるということである患者の数は少なくない。

翌日、来るはずだった患者の若者が来なかった。

「変ね、約束では、今日来るはずだったのに。私の診療が間違ってたのかしら」

今ごろになって自分の過ちに気付く。

「それにしても、奇妙な夢を見る人もいるものね。髪の毛の長い女性が井戸から這い上がるなんて……。それもテレビの中から飛び出してくるなんていう夢……。どれだけ想像力が逞しい方なのでしょう」

新聞を見ると、今日も載っていた。

“ 死人続出。呪いのビデオ ”

「……死因は心臓発作。 ×県警は連続殺人事件とみて解明に取りかかり始めている」

日付を見ると、日曜となっていた。

呪いの夢（後書き）

わかんと思いますが映画『リング』の呪いのビデオの設定を利用しました。

ホラーといえるような代物ではなく、コメディともいえない、微妙な小説です。

独特の世界観を生み出せていれば、いいんですが。

書斎

拙者、姓は鈴木、名は光司。

母が良い作家になるようにと願いつけた名前だそうだ。

母の願い通りに作家となつてみて10年。

今さら転職するのもなかなか勇気がいるものだ。

人生やり直そうと思ひしも、バツ1子持ちの男だとなかなか難しいことが多い。

愛娘の名は美鈴。

今は15歳の中学3年生。

受験を控えた大事な時期である。

拙者の為にと思い、是が非でも公立高校に受かろうとしているらしく部屋で猛勉強中だ。

泣けてくるものである。

成績は学年でも指折り。

公立高校の特待生も狙えそうだと娘の担任の坂本に言われた。

そやつは全くもって信用できないのであるが。

部活はソフトテニス部をやっているらしい。

ユニフォームがとてもしゃらしく、拙者でさえ……。

いやいや、拙者決して15の娘に欲情することなどないぞ！
だが、けしからん。

隣家に住んでおる高田の長男が美鈴と怪しい関係だとか。

確か写真部の部長だそうだな。

これはけしからん。

顔はなかなかの美男子だそうだが、娘はやれん。

しかし最近、高田のこの老いぼれが亡くなったそうだな、残念だ。
火事が原因だったそうだが、火が広がる前に消されたのが幸いだ。

拙者は、消防車が来る前に火が消えているのを見た。

アレは、人間ではない何物かによる仕業であらう。

思えば16年前、拙者の妻であり娘のただ1人の母である大門寺鈴子と出会ったのが人生の狂い目であった。

当時拙者は20歳。

成人になったばかりでとても平凡な男であった。

苗字がそれを物語る。

妻だった大門寺鈴子は15歳。

中学生であった。

キツカケは覚えてないが、出会って恋に落ち、付き合ったのだ。

それから1年の間に数回のデートを重ね、そしてとうとう禁忌を犯してしまった。

15の幼子であった鈴子とイケない行為をしてしまい運悪く鈴子は妊娠した。

そうして生まれた子供が美鈴である。

こうなってしまったからにはやけだ。

翌年、拙者と鈴子は結婚した。

世でいう、できちゃった結婚というやつだ。

15といえば立派な大人だと思ったが時候錯誤だ。

拙者は生まれてきた時代が遅すぎたらしい。

鈴子は二十歳になった時に離婚を要求した。

拙者は断った。

1人の女を愛しつつけるのが男の生き方なのだと思い、そう言った。どうやら鈴子には大学のサークルで好きな男ができたらしい。

その歳で不倫に走ったのだ。

拙者キョトン気味である。（魔邪）

多額の慰謝料を要求され、結局、離婚した。

あれだけの金を渡したのだからまともな仕事をしなくても暮らしていけるだろう。

拙者の家はとても裕福だったため、金には困らず今まで過ごしてきた具合である。

それにしても、美鈴が鈴子みたいな女にならないか不安でならない。顔は鈴子の血を受け継いでいるだけあって美人なのだが、拙者としては男に寄りつかれては困るのである。

言えた口ではないが、中学生（思春期）の娘を持つと不安になるものだ。

今、鈴子はどうしているだろう。

どこか頭を打っているのか、おかしい部分があるから心配である。

拙者、昔の女は忘れられないらしい。

……ふと、鈴子のことを小説にしてみたらどうだろうと思ったがやめておくことにした。

光司は箱に詰めておいた日本酒のビンを取りだし、一気に飲み干した。

書斎に籠もることが多いので普段から置いている。

一気に飲みで力アつとなったところ、書斎に近づく足音が聞こえてきた。

「お父さあゝん？」

拙者は、昨夜のうちに仕上げたくだらない短編の原稿を、娘に読ませることを考えた。

“地図”

その地図には、何かが足りないような気がした。

決定的な何かが。

あと少しで分かりそうなものにな……。

そう思っても、分からないものは分からない。

俺は、コーヒーの入れてあるカップを手に取り、口に含んだ。

「あちつ」

しまった、冷ますのを忘れていた！

そのコーヒーはカップの上で沸騰していたのだった。
ぷくぷくと泡ができ、膨らんでは弾ける。
それは官能的な表現でいうと乳房のようだ。

咄嗟の判断でコーヒーカップに地図を突っ込んだ。
その瞬間

！！！！

地図は光を放った。

ボツという音と共に、燃え出したのだった。

これはこれで良かったのだろう。

砂糖でできた地図は見事にコーヒーに溶け込んだ。

そして……

光の通らない、真っ暗な世界の上で、ロウソクの炎がユラユラ燃え盛っていた。

“誕生日”

ケーキには、ロウソクが挿してあった。

それも、砂糖のロウソク。

だったら……と思い、火のついたロウソクをパクリと飲み込んだ。
その本数、実に15本。

口の中で、色々なものが溶けていくのが分かった。

グチャグチャに、ドロドロに、俺を溶かしていく……。

“歯医者”

「これは溶けてますねえ」

と、歯医者のじじいが言った。

どうやら俺は虫歯のようだ。

やれやれだぜ。

また歯医者の言うこと聞かなくちゃいけないのかと思うと、辛くなる。

「糖分の取り過ぎですよ。気を付けてください」

そう、一言、医者と言った。

“誘惑”

極力、甘い誘惑は避けるようにしていた。
なぜだろう。誘惑は緩和されていく。

辛さを味わい、俺はまた強くなっていく。

中和され、どうでもいい男になったのだろうか。

平凡な、甘くも苦くも辛くもない男に。

娘の感想はこうだった。

「ちょっと、意味がわからない」

拙者はショックでぶっ倒れそうになった。

しかしこれが拙者の生きる道なのだからしょうがない。

仕事とは、ときに厳しい。

人生とは、何かに仕える事なのである。

つまり、人生とは仕事なのだ。

無理に幸せを求めることはない。

拙者たちは、生かされている。

今も、何者かによって、作り上げられているのであろう。

終わりの時間（前書き）

『おまけ』付きです。

おまけについては食事中の方や虫全般に嫌悪感をお持ちの方は読むのを控えた方が良くかもしれません。

それと『おまけ』の文中に出てくる生物の生態的なことについては、空想上のものだとお考えください。

終わりの時間

私は飛び起きた。

どうしてこんなにつまらない時間を過ごしていたのだろうか。

込み上げてくる想いと、突き上げてくる何か。

作り上げることににより、自身の持つ能力を育む。

これにて、完成。

『おまけ』（文字数が足りなかった為）

「あたしのこと好き？」

イブに聞かれてアダムは答える。

「ああ好きだよ」

イブは聞き返す。

「ねえ、ホント？ホントにあたしのこと好き？」

なおも聞かれて、アダムは頭の毛を左右に動かした。

「さつきから言っているじゃないか、好きだよ」

しかしイブは疑う。

「あたしのどこが好きなの？」

アダムは答えた。

「で、x なところかな」

イブは頬を赤らめた。

「それならあなただって一緒じゃないかしら、ウフッ」

アダムは言う。

「俺たち見た目は似ているからナ。区別だつてつきそうにないぜ」
イブはそんなアダムを見て心を燃やした。

「似たもの夫婦ってことねウフツ。あたしたちずっと一緒よね？」

その夜、アダムとイブは結ばれ、現在彼らの子孫は元氣過ぎるくらい元氣に暮らす。

支配者である人間も彼らを見ると皆一様にゾツとし、逃げ出すのだ。

たまに殺そうとしてくるものがいるが彼らはやわじゃない。

永遠を誓った彼らの子孫はきつと人類が消滅しても生き続けることである。

ああ、愛とは何て強いものなのだ。

終わりの時間（後書き）

『つまらない話』を最後まで読んで頂いて、どうもありがとうございました。

この話は、完全なるフィクションとしては初めて書いた物語です。「つまらない」をモチーフにさまざまな短編を書きましたが、どの作品にも無機質さを取り入れています。

何か新たに、感情を吹き込むのは、これからの段階。

「つまらない」「理解できない」「感情移入できない」

3拍子揃った、この作品は、僕の趣味というか趣向が強いです、ある意味。

短い作品はこうあるべきだ、とても思っているのでしょうか？笑
短いだけに思い付いたらそのまま勢いで書き上げるのですが、あの頃夜遅くまで起きてなかなか浮かばないネタを一生懸命に考えてたのを思い出すと、今も懐かしい気持ちになります。

ここまで読んでくれた人達には、ぜひ、次回の作品も読んで頂きたいのと、感想をくだされば、次の作品の参考にもなる（というのは建て前で、本当はみなさんの読後の感想がほしいだけなんです）ので、感想や意見、アドバイスなど、よろしく願います！

みなさんも、自分なりの小説作りに頑張ってください^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376a/>

つまらない話

2010年12月20日02時30分発行